

2' “漢字で教える”漢字教育

真の漢字力を付ける

以前、講談社から刊行した『一年生でも新聞が読める』という本で、「小学校一年生の漢字教育は、“漢字を教える教育”

であってはいけません。“漢字で教える”教育でなければならない」ということを説きました。

それは、学習心理学で言われる「覚えようとしなくて覚えた記憶はいつまでも残るが、覚えようとして覚えた記憶は必ず失われる」ということに拠ります。

例えば、試験のために覚えようと努力して覚えた記憶は、試験が済めば覚えている必要がなくなるので自然に忘れられてしまう、というのが頭の本来の働きです。覚えるのが頭の働きなら、忘れるのも頭の働きです。だから、漢字学習を、覚えようとして覚えさせてはいけません。例えば、「試験をするから漢字をよく覚えて来なさい」というような形で行う学習では、試験が済めば忘れるのが当たり前です。これでは、「忘れるために漢字を学習する」ということになります。事実、どこ

の学校の教師でも、「テストの時には漢字が書けても作文やノートにはその漢字が書けない」と言って嘆いています。「作文やノートに自然と使える」ような漢字力でなければ、真の漢字力ではありません。

母国語の学習では、だれも「教えよう」と身構えて教える者はいないし、「学ぼう」「覚えよう」と努力する者もいません。それでいて、だれもが母国語に熟達するのです。それは、母国語が語られる実生活の中で自然と耳にし、耳にしている間に自然とそれを理解し、覚えてしまうからです。

こうした教育法を、従来の「漢字を教える」漢字教育に対して、「漢字で教える」漢字教育といいます。「漢字で教える」漢字教育は、あらゆる領域の教育を“漢字で”行うだけのものであって、子供が漢字を覚えようが覚えまいが、それは問題にしません。

“漢字で教える効果

この“漢字で”ということ、具体的に述べてみましょう。「手を洗う」という生活指導の場だとします。まず黒板に「手を

洗う」と書きます(園児たちは皆これらの字を全く知らないとします)。

幼児たちは好奇心が強いので、何を書くのだろうと思い、いたずらしている子でも黒板に目をやります。知らない字なので、「何だろう」と疑問に思います。

そこで子供たちに向って、黒板の文字を指さしながら、「今日は、“手を洗う”“手を洗う”ということで、大切なお話をします。皆さんは、どんな時に“手を洗い”ますか。はい、だれか言える人？」と発言をうながします。

黒板の字は何という字か説明しません。子供たちとの話のやりとりで、“手を洗う”という言葉を使う時だけ、いつもこの字を指さして、“手を洗う”と言うだけです。ただこれだけのことで、幼児たちは“手を洗う”という字を覚え、読めるようになるのです。次の日、“手を洗う”という字を手洗い場に掲示しておけば、子供たちは皆何のためらいもなく読みます。

この場合最も大切なことは、漢字をさり気なく指さして読むことです。

“漢字を教える”という気持を全く持たないことです。教師が問題にすれば、子供たちも漢字を意識します。そうなれば真の漢字力は身

に付きません。

“漢字で教える”という漢字教育は、真の漢字力を養うために考え出された方法ですが、この教育を実践している間に、だれの目にもは

ㇿ ㇾ ㇽ

部首 且

地上に物を積み上げた形を表した部首。“積み重ねる”のが本義。

【査】 “記録(書類)を重ねる”ことで“しらべる”という意味を表したものの。

【祖】 なくなったおじいさん、ひいじいさん、そのまたおじいさんを言う。“ネ”は神様に関する部首で“祖”は先祖代々の神様ということ。

【組】 何本もの糸を組合わせて編んだ“くみひも”が本義。今はくむことに限らず“くみ合わせる”意味の“くみ”に広く使われる。

【助】 “力を重ねる”という意味で“力を貸す”、つまり“助ける”ことを表した字。

つきりと見えるようになった大きな副産物があることが判ってきました。

この教育法の実践を始めた幼稚園や保育園から、次のような驚きの声を聞いたのです。「この教育を実践してわずか数か月にしかならないのに、従来の教育では得られなかった大きな教育効果が見えてきました。それは、**幼児たちの集中力が著しく強まり、社会性もぐんと伸び、道徳性が向上した**ことです」というものでした。

それで、この教育がなぜ幼児をそのように著しく向上させるのか、その理由をいろいろな面から考察してみました。その結果考えられたことは「目と耳とで受容した記憶は、耳だけによる記憶の六倍半も強い」ということです。

他の幼稚園や保育園では、文字は幼児に読めないものとして、言葉により幼児の耳に訴えるだけですが、“漢字で教える”教育では、同時に幼児の目にも訴えることになるので、幼児は目と耳とを働かせて学習します。これが第一の理由です。

次に、幼児というものは、目を絶えず動かし遊ばせていて、そのため、心も絶えずそれに伴って遊び動いています。だから、幼児の耳は「聞けども聞えず」という状態にあることが多いのです。大切なお話

や注意が、幼児の心に届きにくい、というのはそのためです。ところが、常に“漢字で”幼児の目に訴える教育をしていると、幼児は、目を学習に参加させる習慣を次第に付けていき、目が自然と落ち着くようになります。

だから、先生の大切なお話や注意が、よく心にしみ通り、教育効果が顕れるのです。このような理由で、“漢字で教える”教育を始めると、わずかの期間で、子供たちの集中力が強まり、社会性が伸び、道徳性が向上するのだと思います。

智能が向上する漢字教育

幼児教育者たちが幼児の漢字教育を受入れない理由は、「幼児期に漢字を習得しても小学校に進めば、幼児期に漢字を学習しなかったものと、全く同じになってしまう」という意見があることによります。

また、漢字教育に反対ではないが、実践を躊躇している人々がいます。それは、漢字が読めるようになった子供たちが、小学校に進んで、仲間よりよく出来るということで慢心し、学習をあまりしない子供に

なりはしないか、と恐れるのです。

このような人たちは、漢字教育に反対する人々よりも多くいます。そしてこれが、幼児漢字教育の普及を大きく妨げているのです。しかし、このような考えを抱くということは、教育者としても最も恥ずべきことだと思います。

私はこれまで数多く幼児や小学生を直接指導してきました。“知っている”“出来る”ということで学習をしないでいる子が全くなかったわけではありませんが、それは極めて少なく、むしろ“よく出来る子”というのは、学習が好きで「よく出来るからもうやらなくてもよい」と言っても人一倍進んでやり、熱中してねばっこい子が多かったと思います。だから、「よく出来る子供ほど熱心に学習するものだ」と私は思っています。「よく出来れば必ず怠る」ということだったら、よく出来る子を作る教育は出来ないことになるのではないのでしょうか。「このような考えを抱くことは、教育者として恥ずべきこと」と先に述べたのは、それが教育否定を意味するからです。

よく出来ても、怠るどころか、益々努力するように指導するのが、教育者の努めです。それに子供の本性は、よく出来れば出来るほど、

一層やりたがるものです。だから出来るように初めにその基礎を養っておけば、あとは放っておいても進んでやり、向上します。

出来ない、人より劣っている、ということを実感した子は、やる気が起らないものです。なだめ、すかし、励ましても、気が沈んでいるから、うまく出来ず、益々やる気がなくなるのです。この悪循環を断つことは実に難しいのです。

幼児の漢字教育は、学習を好んでやる、益々向上して止まない子供を育てるのに最も良い方法だと、私は確信しています。繰り返して言いますが、私の漢字教育は“漢字を教える”漢字教育ではなく、“漢字で教える”教育です。だから、漢字力よりも、「子供の智能が向上する」この教育法が、益々広がっていくことを期待しています。

ㇿ ㇻ ㇼ

部首 巢

品と木との会意字。“木の上にとくさんの鳥がいて□をそろえてさえずっている”こと。噪(さわがしい)の本字。

【操】 手と巢との会意形声字。“手をせわしなく動かす”“手を巧みに使う”“あやつる”ということ。